



## 「音と動き」の場から

津守 真

私はこの数年、毎週、障碍の大人の施設で「音と動き」の場をもっている。ウォルフガング・シュタング註に教えられたことを基本にしている。体育館で音楽をかけて、好きなように動くことに終始するので、だれでも参加できる。音楽のテープやCDは、私があらかじめ選んでおいていくつかの中から参加者にひとつを選んでもらう。民族音楽や現代音楽が多いが、ときにクラシックやダンス曲もまぜる。どれがどれかは分からなくても、参加者が選択することが重要である。自分が選んだということに意味がある。このことはシュタングも強調するところだし、私もそう思う。音楽を聞きながらどのように動いてもよい。きまった型は一切ない。リーダーが相手を動かそうとしてはならない。どの人の内にもある創造的な動きを信頼することを前提として



いる。動きたくなければそれでもよい。ほとんど座ってだけいる場合もある。手も髪にもってゆくとか、足を一步前に踏み出すとか、何でもよい、自分からはじめた小さな動きを尊重する。その点は保育と同じである。

保育の実践に身をおいてきた私は、どこにいても私がかかわることによって相手が自由になる場をつくらないといられない。施設のような生活の場では、どんな責任感をもった職員に囲まれていても、食事、着替え、入浴、就寝など日常生活には、世話をする人の好みや習慣が伴う。個人が自分らしく活動できる場は別に設けることが必要になる。大人の施設では、造形や音と動きの場は、子どもの保育と同じような意味をもっている。

私はもう何年もここで「音と動き」の場をもってきたので、時間になると来て待っている人がぎつといる。二、三人のこともあれば、十数人のこともある。毎回約一時間半だが、いろいろのときがある。皆も私も満足して終わることが多いが、途中で私にあせりが生じて、曲を頻繁に変えたりことばかけが多くなったりすると、双方に不満足が残る。どこまでもゆっくりと相手に合わせてゆくことを心掛けねばならない。相手の身体の動きに合わせて私も身体を動かすが、身体の外見だけに合わせるのでは不十分で、相手の身体の動きの背後にあるその人の感じ方に心を向けることが重要である。そのことを忘れて身体だけを見ると、何かが行き詰まってしまう。相手の気持ちを汲み取ろうとしながら動く、面白くて時間がじきに過ぎる。あるときは、



ほとんど歩くだけで終わることもある。あるときは、いつのまにか、数人が輪になって動くときもある。大体において、後半になると、それぞれに自分の動きがありながら、一緒に同じ空間にいるという共在感が生まれる。途中で音楽を止めて、皆で座っておしゃべりをしたり、歌を歌うこともある。ことばを話さない人が多いのだが、それだけに心の中ではいろいろと考えているので、しんみりとすることもある。先日、私自身が気持ちが悪くて、次々に音楽を変えたことがあった。私の動きも落ち着かなかつたに違いない。それでも表面的にはいつものように終わった。夕食のときに、ひとりの女性が、明日は音楽にゆかないと言う。そして実際翌日は来なかった。前日のその時間に不満足だったことは明らかだった。

いつも座っていることが多いひとりの若い女性に、あるとき、私は背中合わせに座ってみた。いつもは正面から笑いかけると手で私を追い払うのだが、背中を通して何かを通じ合った。そして立ち上がって私と背中合わせで踊った。お互いに楽しい時間だった。その次の日には十数人が参加して賑やかだった。私は背中を合わせる時間も余裕もなかった。彼女の行動は荒れていた。こんな小さな音と動きの場でも、ひとりひとりと気持ちを穏やかにして向き合うことの大切さを思わされた。

数週間後、男ばかり数人集まった。ひとりの男性は、この頃造形教室を気に入っていて、この日は久しぶりに体育館に来た。彼は来るなり私の手を引いて一段高い舞台に上がり、四角い空間を静かな音楽に合わせてゆっくりと歩いた。いつもは体育館全



体の空間を音楽とともに歩いていたのが、この日は狭い舞台の四角い空間の縁に沿って歩き、私が下におりようとする、強く手を引いて舞台の上にとどまろうとする。舞台の縁にまで来て私が足を降ろすと、絶壁の縁に立ったかのようにぎりぎりの所で爪先で踏みとどまる。この限られた空間だけにいたいのは明らかだったので、私はしばらく舞台の上だけを一緒に歩いた。私の顔を見て本当にうれしそうに顔をほころばせるので、私まで心が楽しくなった。舞台の狭い空間は私だけと一緒にいるのを保証する空間だったのかもしれない。あるいは、この頃造形教室に入り浸っているこの男性は自分が抛り所とする場所を見つけたと私に知らせようとしたのかもかもしれない。ことばを話さないこの男性は、どんなことに出会っても決して乱暴をすることも荒れることもなく我慢強い。通常の四十歳の男だったら怒ってしまったようなときにも、決して怒りを外に出さない。そして他人から言われたことに柔順である。もしも職場でこういう人が一緒にいたら、仕事は遅かったとしてもきつと尊敬されるに違いないと、私はこの人と手を組んで歩きながら考えた。私はときどき自分の感想を歩きながら話すのだが、このときもこんな話をする、彼はまた顔中を笑顔にした。

障碍をもつ人は、ことばを話さなくとも、手足が動かなくても、劣った人ではない。それぞれに周囲の動きを観察し、いろいろの感想をもっている。心の奥に憤りや悲しみをもっている、他人を責めることが少なく、おかれた状況を自分で受け入れ、一生懸命に生きようとしている。もっとこの人たちが社会に出ていったら、社会



全体に心が穏やかになるに違いない。

注

ウォルフガング・シュタンゲは、英国におけるクリエイティブ・ダンスの指導者である。そのワークショップにはかならず障碍をもつ人を交えている。日本でも毎年定期的にワークショップを開いている。次に引用するのは一九九六年サマーアートスクール、シンポジウムでの彼のことはである。「芸術は参加するものにとつてすべて平等です。だからこそ、障碍をもっているとかいえないということはまったく関係ないんですね。……障碍をもつ人たちが問題をもっているのではなくて、私たちが住んでいる社会のほうに問題があるのです。すべての人が健常者のようにならなくてはいけないと思うのは、私たちの押し付けでもあります。三十人であるうが、四十人であるうが、五十人であるうが、とにかくそこにいる人間のひとりひとりが個人なのです。そして、ひとりひとりに個性があつて、ひとりひとりに違いがあります。障碍をもつ人たちの場合、その違いが見て明らかになっているんですね」（ミュージズカンパニー発行）。